

「これからのロータリー」



2015-2016年度 RI 理事エレクト

齋藤 直美

ただ今ご紹介いただきました2760地区(愛知県)豊田ロータリークラブの齋藤と申します。地区大会の開催、ガバナーの菅原さん、そしてホストの仙台泉ロータリークラブの皆さん、本当におめでとうございます。御苦労様です。私は、こういう席でプレゼンできるような素晴らしいロータリー歴があるわけではありません。年の功で順番に、こういうポジションに出てきたというだけの男でございます。菅原さんのほうから、地区大会に来ないかというお誘いを東京で受けました。時間があたらお邪魔しますねというお話もしたんですけど、こともあろうに、「これからのロータリー」というとんでもないテーマを頂戴しまして、本当にびっくりしました。これをどういう切り口でどんな展開にしていっているのか、とても悩みました。

今から申し上げますけれど、私は入会したのは1979年、40歳と3カ月のときであります。

その後、1980年に我がクラブは20周年記念事業として市民マラソンを開催したのですが、このときに本当は、我がクラブからガバナーが出るはずだったんですけど、トヨタ自動車さんとの関連で、当時は30万体制をつくらうということで、とてもロータリーなどやっておれんということで、その候補の方は身を引いてしまったというわけです。当時、私が入ったときは招待学生、たぶん皆さんはご存知ないと思うのですが、招待学生という委員会に属していましたが、子どもたちが諸外国から来たらそれを接待するという役割だったと思っております。1981年にスリランカ、今のRI会長の出身国ですね、あの国は仏教とヒンズー教の戦いのあとの遺跡がジャングルの中からだいぶ出てきたんですね。そこへ見に行こうということで、友だちとツアーの中に紛れ込みました。そのときに首都コロンボでメーキャップに行きました。私が行くというので、英語ができない奴が来るということで、英語がわかって日本語も片言わかるというメンバーを、私の横につけてくれました。夜間例会です。食事を延々とやりました。やれやれと思ったら、それから卓話が始まりました。教会の牧師さんだったと思います。その卓話は、スリランカの子どもたち、特に乳幼児たちの死亡率が非常に高く、農村部の衛生状態を改善しない限りは幼児の死亡率は改善されない、そのために看護婦を大量に養成しなければならない、そんなような話だったと思います。私はちょうど招待学生だったもので、これはおれの仕事だと、帰ってきてクラブ会長に言いました。スリランカではこういうことがある。ぜひとも看護学生を実際に育てたいという話をしました。そうしたら、ものすごく叱られたんですね。そんな事業計画は入会3年目のおまえのやることじゃない。おまえはロータリーを知っているのかと言われて、ロータリーというのは事業計画は理事会で決めていくわけですから、

その前に、ロータリーのいろんな事業は単年度制で片付けるものだ、それから財政を決して圧迫してはならない。尚且つ、よそのクラブとの交流活動をしてはならない。そういう不文律がありました。

そういう経緯があつて、これは却下されました。「そういうものかな、ロータリーは」ということで終わってしまったわけです。よくよく考えますと、私の属している委員会の事業計画というのは、私の知らないうちにできあがって、次年度の事業計画として発表されるわけです。これはおかしいのではないかと。僕はその委員会にいるにもかかわらず、事業計画に関与していない。僕は辞表を出しました。辞表を出したらまた叱られました。紹介者の顔に泥を塗る気か。別の世界のようなお話がありました。

それで私の失われた20年が始まります。専らごはんを食べて帰る。そして、自分の稼業に専念しました。このときに、ロータリーの例会やいろんなお付き合いに出られないという話を、出入りの金融会社、地方の金融公庫の会頭にその話をしました。そうしたら、「ロータリー活動をしようと思ったら、あんたがいなくてもいい組織づくりをしないとダメだよ」こう言われました。町の開業医というのは、自分ひとりです。私はい整形外科をやっているものですから、病室があるので病院というかたちをとりました。僕は医療法人をつくらうと法人化を始めました。それから延々と稼業に専心して20年たちました。20年経ったら、降って湧いたように会長の順番が僕のところに回ってきました。ロータリーを真面目にやっていたのですから副会長をやれという話に戸惑いました。そのときの会長が1年前に胃がんの手術をやったんですね。副会長を僕がやるというこ



とは、彼の主治医みたいな役の副会長かな、と思ったんですね。ですから、いいですよ。そうしたら、メンバーの多くは「おめでとう」と言うんですね。エレクトをやった次に会長になると。それは僕にとっては青天の霹靂です。というのは、僕はロータリーの勉強はしておりませんからそんなルールは知りませんでした。当時、皆さんも「ロータリー入門」という冊子をほとんどの方はお読みになったと思うのですが、「ロータリー入門」を副会長になったときに読み

なさいと渡されたのが初めての教科書と言えは教科書でした。その後、それを読んでいるうちに、とても楽しくなってきたんですね。ロータリーの文献を漁っているうちに。そのなかの一冊が小堀憲助さんが書かれた『ロータリーその功罪』という本でした。それは読み応えのある本でした。これを読み始めて目から鱗でした。ロータリーとはというのがだんだんわかってきたんですね。ロータリーとはというのがわかってきたら、そこから文献の孫引きが始まるわけです。孫引きをやっていくなかに、例えば皆さんがよくご存知の人たち、ガイ・ガンディーとか、シェルドン、そういう人たちの文献がどんどん出てくるのです。当時のロータリアンというのはものすごく勉強していました。そのなかの一冊に、愛媛県の小さなクラブが発行した『ロータリーへの道』という本があります。いちクラブが作っているわけですから。そんな本を読んだりしておりました。そのなかにも、たとえば職業倫理の話とか、職業宣言の話、4つのテストの話、かの有名な23-34の声明がありましたね。そういう文献の中に、古沢丈作が大連ロータリークラブで作ったというか、大連宣言というようなものもありました。どんどん読んでいくうちに、日本のロータリーの文献は、皆さんもご存知の

職業奉仕一辺倒の文献でした。そのなかに僕がのめり込んでいて、結局ロータリーとはこういうものだと知ったのは、そういう文献を読んでいたおかげだったと思います。しかし、これぞ浅学非才!知識のうろ覚え、物真似で自分で考え、まとめることをおこたったりしました。

何の因果か、その後ガバナーになりました。ガバナーになった頃が、生意気のようにですけど、自信満々だったんです。ロータリーのことは何でも知っている。ロータリーの思想も知っている。哲学も歴史も知っているという、そのくらいのうぬぼれがありました。ですけれど、ガバナーをやって、地区委員の連中にどんどん接していくうちに、彼らは「おまえさんは間違っているよ」という話を酒の席でちくちく、ガバナーに向かってやるわけです。だんだん雲行きがおかしくなっていく。僕がガバナーのときに、ポリオワクチンでインドへ3回行ったり、RCCという農村歌舞伎の同好会を作ったり、ローターアクトを作ったり、中部名古屋未来ロータリークラブというロータリー財団のOBたちを中心としたクラブをつくったり、WCSでラオスへ行ったり、ラオスに行ったのは小学校を寄付するという事で、2つくらいやりに行きました。そういうなかで、僕はほとんど地区委員長の皆さんに教えられてきたんですね。高慢ちきな自信満々の鼻をもの見事に折られました。ロータリーは違う。あんたが言っている職業奉仕の考え方は間違っている。それは偏った見方だよということを、彼らは直接言わないのですが、だんだんそんなふうに言われてしまいました。それをやっているうちに、僕はロータリーがとても楽しくなったんですね。自分がこっぴどくやられて、かつて入会した当時、社会奉仕なんてロータリーのやることじゃないと言われて、ああそうかと思ってきたことが、とても恥ずかしくなってきたわけです。我がクラブは年に2回くらい大きな川、矢作川という、昔秀吉が蜂須賀小五郎と出会った岡崎の橋の架かっている川なんです、その

川をきれいにしようという市民運動が豊田の町にあります。それを他のロータリークラブ、うちの町には5つクラブがあるのですが、4つのクラブはやるんですね。うちのクラブはやらない。行きましょうよという話をしたら、ロータリーはそういうことをやるものじゃないと言われたのです。先輩たちから、ゴミを捨てるのはおれたちの仕事じゃない。ゴミを捨てない人をつくるのがおれたちの仕事だ。そういう詭弁のようなことを言われました。それくらいうちのクラブは、社会奉仕をやらないクラブでした。ですから、そういうものだと育て、地区にいて、地区の連中にいろいろ教えられて、やっとな楽しいロータリーの世界を見せていただいたような気がします。ガバナーが終わったら、同期のガバナー、(今日は同期の笠井PGもお見えですけど)ガバナー会議長に青少年交換のNPO法人をつくるから手助けしろと言われて、はいとお引き受けしました。3年経って、次、おまえが理事長をやれと言われて、2012年にNPO法人RIJYECの理事長をやりました。ところが、こういう自分のロータリー観がふらふらしているに、そういうこととまったく関係なくRI、国際ロータリーはどんどん、いろんなことをやってくるわけです。やってくるというとおかしいけれど、ロータリーのためにいろんな組織作りをやってくる。僕が会長をやった2002年にはDLPができていますね。2004年にはCLPができて、2006年僕がガバナーをやったときは危機管理委員会というのができました。ロータリーに危機管理委員会なんておかしいじゃないかと、先輩たちに噛みついたのですが、「俺はやらない」と言って、次のガバナーに「危機管理委員会をやってね」という話をしました。自分の生き様と比較して、それと関係ないところで国際ロータリーは、ロータリーを強くするためにいろんな政策を打ってきます。今でも打っています。2010年に青少年交換を一生懸命やっている時には、戦略計画というものが新しく生まれました。RI会長

エレクト、ジョン・ジャームさんと管理委員長エレクト、お二人で2015年6月に国際ロータリーに、戦略計画委員会というのを常設で設置しました。財団管理委員会にも同じ委員会を設置しました。この2つを作ったということは、「ああ、そう」でふつうは終わるんですね。ところが、縦にずっとロータリーの政策を見てきますと、この2つを作ったということは、ロータリーの方向付けを決めたということなんです。財団とRIが手を携えて同じ政策を作るということ、新たにやり始めた。そうすると、そこから、これからのロータリーというのがだんだん読めてくるような気がします。私はそんな気がします。

ロータリーの歴史を眺めていくとよくわかるのですが、1960年代、青少年奉仕プログラムというのが、インターアクト、ローターアクト、RYLA、青少年交換委員会というような4つの委員会がクラブに誕生します。それまでは他クラブと交流してはいけない、財政的に迷惑をかけてはいけないからということになっていた。ところが、交流をしようという話になったから、他クラブと交流してもいいという、ひとつタガが外れたんですね。1980年に3Hプログラムの提案がありました。3Hプログラムというのは死語になっているかもしれませんが、health ,hunger ,humanityですから、保健、飢餓追放、人間性尊重。この3Hプログラムというものができることによって何が変わったかという、自分たちの地区、自分たちのクラブを飛び越えて、よその国の人たちと世界の子どもたちのために、世界の病気で苦しんでいる子どもたちのために、そういう奉仕活動をしようという、自分たちがつくった型を破り始めたんですね。1985年



には、ポリオ撲滅のための資金集めが始まります。本当はもうちょっと古いんですね。1980年か、81~82年の頃に東京のお医者さん、ロータリアンですが、お二人の方がポリオワクチンをマニラで投与することから始まったんですね。このときに、個人的・精神的な奉仕(職業奉仕)から、団体的・金銭的奉仕(国際奉仕・社会奉仕)に大きくロータリー運動は展開するわけです。展開された、シフトされたと断定するのは、日本のロータリーだけですね。おかしいじゃないか、ロータリーは個人でしょう、それを団体で金を集めてやるんだというふうには、食ってかかったのは日本のロータリアンだけです。このときに、先ほど言いました愛媛のあるロータリークラブ、あるいはそこが中心となった愛媛の地区は、ガバナー月信を出したり、週報を出したりするなかで、ガバナー・パストガバナーの討論会をやったのが記録されています。世の中はそういう流れになっているのだから、こういう方向に行くのは当然でしょうというガバナーに対して、「何を言っているんだ、日本はあくまでも日本流のロータリー精神論を守らなければいけない」などなど。あ、愛媛ではなかったですね。

ごめんなさい。長崎南ロータリークラブです。一冊の本になっています。1年間の月信をまとめたものです。そういうふうには個人なのか、団体なのかという論争がこのへんから始まり出した。ところが、これは日本には全く…、たぶん意識的ではないと思うんですけど、紹介されなかったのです。それは何かと言いますと、僕がそんなことを言うてはいけないんでしょうけれど、1930年、要するに23-34という決議、声明が発表されたあの時代は、職業奉仕論をアメリカのロータリークラブはバンバンやっているんですね。職業倫理、そして4つのテスト、そんなことは、アメリカのロータリアンは殴り合い寸前のような、クラブを割るような論争をやっているのです。そのことが日本にはあまり紹介されないで、精神論だけが入ってきたのです。なぜか。そのときに、米山梅吉さんは、大阪ロータリークラブをつくった福島喜三次さんに対して、調べてくれ。「ロータリーとは何だ、どうもいいものらしいから、福島君、君調べてくれ。頼んだよ。」ということ言うんですね。彼は一生懸命調べて帰ってきて報告するわけです。そのときアメリカは、職業奉仕をバカバカやっていたわけです。アメリカはポリオの子どもたちが大量に発生したんですね。ポリオはご存知のように足が不自由になって歩けなかったりするんですね。そういう子どもたちを何とか救おうではないかとやったのが片方のロータリーです。片方のロータリーは職業奉仕を、職業倫理というのをガンガンにやっている。片方はそういう子どもたちを守ろうではないかとやっていた。福島さんは、その論争の中で、おそらく優勢であった職業奉仕のグループの情報を米山梅吉さんにお伝えしたのだらうと思います。それは、日本の武士道とか、日本の儒教とか、日本の倫理観だとか、そういうものからいうと、ロータリーの精神論というのは純粋に受け入れてもらえるんですね。それもサポートしてくれる。「そうだ、そうだ」とやるわけです。そういうなかで、日

本のロータリーは職業奉仕という運動になっていったと、僕は思います。僕が入った頃はそういう話で、ロータリーは職業奉仕ですよという風潮だったと思います。

次はなぜ戦略計画なのかというテーマなのですが、増加するグローバルな人道問題に対処するために、新しいルールを作り始めた。ロータリーの維持発展のために。先ほど触れました2002年のDLPは、地区組織をシンプルにしよう、2004年はそれに合わせたCLPでクラブをシンプルにして、たった4つの委員会にしていたらどうか。4つの中でどう分化するかはクラブの人数によって決まることですが、効率よいクラブにしましょう。2006年には危機管理委員会を地区内に設置してくださいと、なぜ危機管理なんですかね。なぜなんですかね。僕は3週間前にアメリカから理事のオリエンテーションを受けて帰ってきましたけれど、そのときに危機管理というのは非常に言われていました。ロータリーは危機管理をしっかりとやらなければこの組織は維持できない。そのために、理事になるおまえたちはここを勉強しなさいと言われてきました。青少年交換の中では賠償保険、セクハラ保険といわれている賠償保険に法人化して入りなさいと、これは全部組織を守るためです。新しいルール作りを始めたというなかには、2週間に1回のメーキャップでいいとか、ロータリアンの資格が、極論として家庭の主婦でもいいとか、そういうふうにはどんどん変わってきたんですね。社会の変化に対して、それに柔軟に対応していこうという姿勢から、一つひとつの、僕らにすればタガがどんどん外れていった、というふうになってきたのだらうと思っています。

今言いました2010年に戦略計画が誕生しました。この戦略計画というのは、クラブ奉仕の特化、なんだそれはという話になりますが、今から20年前、世界のロータリークラブは、1クラブ60人くらいだった。今は1クラブ平均30人く

らいです。クラブはどんどんできるのだけれど、メンバーは増えないですね。120万人で止まっています。そういうことから、RIは2010年に戦略計画を作りました。これは、自分の町のニーズは何か。自分はなぜロータリーに入っているのか。そこから、自分の町のニーズを分解、分析して、それに絞り込んで、奉仕活動に打ちこみましょうというプランです。そのときに、その周辺にあるニーズというのは、いっぱいあるわけです。多くは自治体が解決してしまいます。多くは、厚意あるボランティアの皆さんが解決します。そういうなかで、本当にロータリアンが生き残るために、その町で自分たちが輝いていくために、自分たちが自己主張できるために、それは何か、それを作りましょうというのが戦略計画です。だから、小さくなったクラブでも大きく市民の皆さんにPRできる強いクラブを作りましょうというのが戦略計画です。

昨日実は、ガバナーエレクトの濱守さんとお会いしました。我が同期の仲良しの笠井バスターガバナーにもお会いしました。それは名古屋でロータリー研究会が開催されるのですが、それに向かって、3.11を忘れてもらってはイヤだ、だから、バスターガバナーが大勢集まるロータリー研究会で発表してくださいと頼みに行きました。私はこのお二人とお話するなかで、こんな屁理屈をいう戦略計画なんてどうもいいと思いました。というのは、お二人の話を伺っているうちに、お二人は、岩手、宮城の中でのもの見事に戦略計画を実行されているのです。大船渡に至ってはメンバーが増えているのです。戦略計画の狙いは、市民の皆さんに役立って、大きく輝いて、PRして、そしてロータリーに入ってくれるメンバーを作っていきますというのが狙いなのです。だから、昨日の話の中に、戦略計画というのが、とても上っ面走りのような感じがしまして、昨日はいい勉強をさせてもらったと思っています。2010年の戦略計画まで来て、RIは社会奉仕団体にするための総仕

上げを成し遂げた。そして、そのために先ほど申し上げましたRI会長エレクトと、財団管理委員長エレクトが二人揃って、2015年以降のロータリーの方向を決めましょうと、こういう大きな戦略が出来てきたということです。

この戦略計画は、どうでもいいことですが、文章にすれば、地域社会に貢献していくための将来への指針ですよ。ガバナーが代わっても会長が代わっても、方向は一緒です。ロータリーとは継続して地域社会に貢献していく組織ですよ、というふうに方向付けをしたということです。

次に、これは、菅原さんから宿題をいただいた「これからのロータリー、ポスト・ポリオ」これは何だろうという話です。これは今ずっとお話したことを、そのまま流れ込んでいけばいいのですが、来年の会長ジョン・ジャームさんは、私どもの研修会の開口一番、こう言ったんですね。「世界中のロータリアンがポリオが終わった後、何をやりたいのか、そのニーズは何だろうね」そういう質問をされました。いろいろあるんでしょうけれど、考えてみますと、ロータリーの中には6つの重点分野という大きなテーマを掲げています。何年になったらこれが片付くのかというテーマばかりで、グローバルで大きすぎて、どこから手をつけてという問題ばかりだと思います。平和と紛争、疾病予防と治療。これは、実は皆さん意外かもしれませんが、結核ですね。WHOが結核の死亡率が落ちていないことを非常に注意しています。警戒警報を出そうかなというあれが、どうもあるようです。それから、水と衛生、母子の健康、基本的教育と識字率の向上、これは格差の問題、所得格差の問題ですね。それから経済の問題。ポスト・ポリオの中には、このなかのどれかが挙がってくるのではないだらうかと。グローバルのテーマとして、というふうに感じています。

これからのロータリーのその2ですが、驚くべき文献がありました。これは、ちょうど30年前、

1985年です。1985年の『ロータリーの友』6月号、そこに「次期RI総長フィリップ・リンジー氏に聞く」というページがありました。彼は言っているんですね。「組織がどんなに大きくなっても、あるいはロータリーの事業のいくつかが世界的な規模のものとなっても、(ポリオですね)、地元で奉仕するニーズは常にあるはずですよ。つまり、ロータリークラブは地域社会を基盤とする奉仕団体でありますから、ロータリーの実際的な活動は公共的なものでありますが、ロータリー自体はむしろ個人的でプライベートなものというべきでしょう」事務総長がそういうことをおっしゃっている。戦略計画でポスト・ポリオといっても、自分の町に帰れば、自分の町をどうやってよくしていこうかなというのが戦略計画です。30年前の事務総長がこういうことを言っていて、30年たって原点回帰になったというふうに、私は思っております。

ですから、菅原ガバナーに「これからのロータリー」というテーマをいただきましたけれど、これを不良ロータリアン、スリーピングメンバーであったがゆえに、大学の受験もどきの勉強をし、地区の委員長たちに叩かれて、「おまえのロータリー論は違う、職業奉仕論は違うよ」と言われ、なんで違うのかなとずっと考えてみると、やはりパストガバナーの多くの皆さんに、「ロータリーは社会奉仕団体です」なんていうと、叩かれちゃうんですね。おまえは理事を辞めろ、パストガバナーの資格を返せというふうになっていきます。しかし、実際は多くのパストガバナーの皆さんは、それを解っています。ただ、言うときと角が立つので、「そうだね、職業奉仕だね」と言います。だけど、職業奉仕は片足、右足なら右足の大きな軸足なのです。社会奉仕は左足なんですね。アメリカのロータリーがそうであったように、職業奉仕というのは当たり前のことなのです。自分が真面目に事業をやり、従業員を給料を保障し、地域の皆さんと仲良くし、クラブを良くしていくというのは当たり前のこ

となのです。その他のaとして社会奉仕があるわけですよ。これをやりましょうというのがロータリーだと思えます。これからのロータリーは、30年前の事務総長が言ったように、自分の町作りです。私はそう思います。

終わります。ありがとうございました。

